



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
F A X 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

「津波が起きたら命でんでんこだ」の教訓 ― 故郷・南三陸町の「東日本大震災追悼式」に参列して ―

最知浩一

東日本大震災から十年目の先月十一日、宮城県南三陸町主催の「東日本大震災追悼式」に参列した。地震発生の午後二時四十六分には、時報を合図に黙祷を捧げて、亡くなられた方々の冥福をお祈りした。

南三陸町はリアス式海岸で名高い南三陸金華山国定公園(現三陸復興国立公園)に位置して、漁業が盛んな町である。私はこの南三陸町に生れて、高校卒業までそこで過ごした。そのわが故郷を千年に一度と言はれる巨大津波が襲ったのである。津波は、沿岸部のほぼ全域の家屋や建物を飲み込み、多くの尊い命を奪った。発生から八日後、やうやく現住地の埼玉から故郷の地へ辿り着いた時、変り果てた光景に言葉を失った。生家は跡形もなく流されてゐて、私は父を失った。親戚の者も、友人も犠

牲となった。福島での原発事故も重なって、この先日本はどうなるのだろうかと暗澹たる思ひだった。

あれから十年が経つ。被災地は道路や公共施設が整備され、住宅の高台移転の工事が進められて、以前より便利にはなった。しかし、かつての故郷の景色はすっかり様変わりして、人々の心の繋がりが年々薄れて来たやうにも感じられる。震災前の故郷の暮しが日ごとに懐かしく思ひ出されてならない。大震災追悼式に参列して、改めて震災での経験をしっかりと記憶に留め、再び起るであらうその日への教訓として多くの人に語り継いで行きたいと思った。

東日本大震災による犠牲者は、死者一五、八九九人、行方不明者一、五二六人(三月一日現在、警察庁まとめ)に達する。地震発生時刻の約三

十分後には六メートルの津波の第一波が岩手県沿岸に到達して、その後各地に十メートルを超える大津波が何度も押し寄せた。地震発生が下校前だったことで、児童や生徒が教員の誘導で高台に避難し難を逃れたものの、残念ながら多くの幼い園児や児童が津波の犠牲となってしまった。東北の三月はまだ冬の寒さだが、日中の明るい時刻であったことで高齢者や子供も歩いて高台に避難出来たのは不幸中の幸ひだった。もし地震発生が深夜や明け方であったならば、どの人は自宅に留まっていたはずで、犠牲者は想像を絶する数になっていたことだらう。

これまでも三陸地方は幾度となく津波の被害を蒙って来た。明治二十八年および昭和八年の三陸大津波、さらに昭和三十五年には南米チリで発生した大地震による津波が、翌日三陸に到着して多くの方が亡くなった。その時の教訓をこの地方の先人達は子々孫々まで語り継ぎ、学校や職場では毎年数回の避難訓練を行っていた。今回その教訓が生かされたが、それでも二万人に近い犠牲者が出たのである。

震災後に内閣府、消防庁、気象庁が共同で、岩手県、宮城県、福島県の避難所を訪れて、地震の揺れがおさまった後の避難行動についての調

査を行った。それによると、「直後にすぐ避難」した方が五十七%と最も多かったものの、何らかの行動を終へてからの「用事後避難」が三十一%、何かの行動をしてゐる最中に津波が迫ってきた逃げた「切迫避難」が十一%だった。四割余が何らかの行動をしてゐたといふ結果だった。

三陸地方には「津波が起きたら命でんでんこだ」といふ教へがある。「でんでんこ」とはこの地方の方言で、「各自」、「めいめい」といふ意味だ。「津波が起きたら家族が一緒に居なくとも気にせず、でんでんばらばらにすぐに高所に逃げて、先づは自分の命を守る」といふ教へだ。これは、「自分だけ助かればよい」と言ふ自己中心の行為ではなく、地震が起きたら各自で避難することを事前に家族で話し合っておいて、夫々が自分の責任で直ぐに高いところを目指して避難するといふこれまでの経験から生れた教訓だ。

大地震の後には大津波が襲来するといふのが東日本大震災の教訓である。近い将来、首都直下型地震や南海トラフ地震の発生が予想されているが、沿岸部に住む方々には、「津波が起きたら命でんでんこだ」となるやうに、平生からご家族で話し合っておいて貰ひたいものと願つてゐる。(株)アイセルネットワークス